厚生労働大臣賞（優秀賞）

日本の水

青森県　八戸市立是川中学校　二年　小林　千花

亡くなった私の祖父は「水をつくる人」だった。四十年以上もの間、市の浄水場やポンプ場で市民のための水を作り続け、みんなに届け続ける仕事をしていたそうだ。

私の知っている祖父はすでに退職し、優しく明るい、たくさん遊んでくれたおじいちゃんだった。そして私が四歳の時に亡くなったので、祖父の仕事についてはあまり詳しくはなかった。

母から私の知らなかった祖父の働いていた頃の話を聞いた。

水道の水は、二十四時間、すべての人に届けることが必要だ。そのため、祖父の勤務は日中働いた次の日は夜勤、夜勤から帰宅した次の日が休みという四日間のサイクルを繰り返していたそうだ。土日が休みではない日も多く、母は家族旅行などもほとんど連れて行ってもらったことがなかったそうだ。

水の作り方は、その日の川や湧き水のコンディションを確認するところから始めるそうだ。にごり方や雑菌の量、ＰＨなどを調べ、それに合わせ、薬品を加える。不純物を凝集剤で取り、ろ過し、塩素を加えて殺菌し、水道水を作る。

大雨や台風などのときは急激に水が濁るため、真夜中でも職場に駆けつけ、水作りを手伝わなければならないときもあったそうだ。

それから、季節や時間、使用量を調べながら、送水量を考えてそれぞれの地域に水道水を送っていたのだそうだ。

祖父は、「八戸の水は自分たちが守るんだ」と誇りをもって仕事をしていたそうだ。

八戸の水は「軟水」で、味がまろやかでおいしく、髪や肌がつるつるになる良い質の水でもあるそうだ。

塩素の匂いがする水が嫌いな人も多いが、匂いのない水は送水の末端の、殺菌力の低下した危険度が高い水だということも初めて知った。

水道の蛇口をひねると出てくる水は、かつて祖父が誇りを持ってつくり、今も誰かが私たちに届けようと、心を込めてつくり、送ってきているものなのだと思う。

私にとって、水道水は少しだけ特別なものに感じられるようになった。

私たちは日常で沢山の安全な水を使用している。だが、世界には安全な水を飲めず、そもそも水を飲めないという人もたくさんいるのだ。二〇二〇年には安全な水を飲めない人が世界中に二十億人もいる。これは日本の人口の十六倍にもあたる。

日常で使用している水は、当たり前に安全だと信じているが、その安全は日本に豊富で良質な水があり、誰かが守ってつくってくれたものなのだと知った。

水道から出る水がどこから来たのか、どうやって来たかを知ると、大変な手間がかかり、私たちに届いていることが分かる。そんな水を、これから大切に使っていきたい、未来の誰かが使えるものへと繋げていきたいと思う。